
カノジョの話 ・ 清実と翔太の場合 ・

澤群 キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カノジヨの話 ・ 清実と翔太の場合・

【Nコード】

N 8 4 6 8 Q

【作者名】

澤群 キヨウ

【あらすじ】

厳しい女上司と、ほんわか男子社員に起きたとある出来事。

定時よりも1時間遅くなって、ようやく仕事が終わった。
パソコンの電源を落とし、帰りの支度を済ませる。

やれやれ、と立ち上がったところで、仕切りの向こうの人物と目が合った。

笹本 清実。

36歳独身。僕の、上司だ。

こちらを恐ろしい顔で睨んでいる。

頭の中で、慌てて形相の理由を検索した。

上司の自分がまだ働いているのに、お前はもう帰るのか。

いつもどんくさいお前のせいで、自分の帰る時間も遅くなってるんだぞ。

さっきメールで送った報告、ちゃんと口頭で伝えに来いや！

それとも、今日こなした仕事の中に、不十分なものがあったのだろうか。

なにせ毎日あれもこれもイチイチ文句を言われる日々なので、理由はいくらでも挙げられる。

さて、どれが正解だろう。

「あの……」

おそろおそろ、不機嫌の理由を聞こうと口を開くと、清実の眉間に寄ったしわがますます深くなった。

「うつ……」

ここから人外の魔物に変身して襲ってきそうな唸り声が聞こえる。なんとという恐ろしさだろう。

そつと、このまま横に歩いて、フェードアウトできないだろうか。ゆっくりと、一步後ろに下がる。

そして、出口の方へ……一步右。

「須田くん」

般若のような顔から、自分の名前が呼ばれた。

「はい！」

即、返事をした。ハキハキと。若い男性らしく、明朗に。

「……呼んで」

「はい？」

声が小さい。よく聞こえなくて、思わず聞き返した。いつもなら怒られるパターンだ。

デスクに置いた手を小さく振っておいでおいでしてくるので、仕方なく上司の席へと行った。

「笹本さん、どうしたんですか？」

「……動けないのよ」

横に立つ自分の方を向かず、まっすぐ前を向いたまま答えた。

「ぎっくり腰みたい」

「え？」

「ぎっくり腰！」

搾り出すような声で、そう告げられた。

清実は無言のまま動かない。

あまたの戦を勝ち抜いてきた伝説の司令官の真似、などではなかったらしい。

翔太の想像する「ぎっくり腰」のイメージそのままに、清実は座った姿勢のまままったく動けなくなってしまったようだ。

「タクシー、呼んで欲しいんだけど」

「救急車の方が良くないですか？」

「大丈夫よ、タクシーで。ついでにこの近くにまだやってる整形外科がないか調べてくれない？」

はあ、と返事をして、上司の頼みを聞くことにした。

もう残っている人間は近くにいない。自分が「いや、もう帰るんで」なんて言ったら、彼女はそのまま何時間も、最悪明日の朝までここに座り続ける羽目になってしまう。苦手な上司とはいえ、さすがにそこまでの仕打ちをするわけにはいかないだろう。

自分の席に戻って、再びパソコンの電源を入れた。

インターネットのブラウザを立ち上げ、タクシー会社の番号と近所の整形外科を検索する。

一番近いのは、塚山整形外科。診療時間は20時まで。気の利く医院だ。休診日ではないことも確認して、目の前でしかめっ面をしている上司に報告した。

すぐにタクシーも呼んで、また電源を落とす。

並んだ机の列をぐるつとまわって、清実の元へ戻った。

「笹本さん、タクシー呼びましたよ」

「……ありがとう」

唸るような礼を言われ、そして気がつく。

「カバンとか、どこに置いてますか？帰る支度しないと」

清実は一瞬、顔をしかめたように見えた。が、小さなため息をついてすぐに言った。

「お願いしていい……？」

「ええ、大丈夫です」

机の1番下の大きな引き出しに渋めの濃い赤色のカバンが入っていた。

そこに手帳やら携帯電話やら、指示されたものを入れていく。

カバンの中がちらちらと目に入る。

中は持ち主のイメージと相反して、可愛いピンクやイエローの小物がたくさん入っているようだ。

女性のカバンの中身を見るなんて、しかも恋人でもない人間に見られるなんてイヤだよな。

丁寧とはいえないが、プライバシーに配慮して物は適当に入れていく。

後で文句言われてもまあ仕方ない。まじまじと中を見られるよりはいいはずだ。

「電源落としても大丈夫ですか？」

「いいわよ」

カバンを机の上に置き、パソコンの電源も落とした。これで準備は万端だ。

あれ。そういえばこの人は自分で歩けるのだろうか？

「笹本さん、1階まで行けます？」

「手、貸して」

「ええ、もちろん貸しますけど……」

手を出すと、清実は腕をガツシリとつかんできた。
ゆっくりと立ち上がる。

どうやら固まったまままったく動けなくなったわけではないらしい。

小さな唸り声をあげながらじわじわと立ち上がっていく。
苦しい顔を、どこかで見たような気がした。

そうだそうだ。2体セットの仏像かなにか。あうん、だったかな。
あれと似ている。

まるでコントで芸人がやる老婆のような動きで、なんとか歩いている。

そんな上司の分のカバンも持って、いつもの3倍くらいの時間をかけてようやく1階にたどり着く。

玄関のドアの前には、既にタクシーが止まっていた。

外でキョロキョロしている運転手に、手を挙げる。

こちらの様子を見て事情を察したのか、運転手は中に入ってきて移動を手伝ってくれた。

なんとか後ろの席に乗り込ませ、塚山整形外科へ行くように頼む。

「お姉さん、もしかしてギックリ腰！？」

運転手は少し愉快そうに声をかけてきた。その口は即、世にも恐ろしい顔で黙らされる。

タクシーはすぐに目的地に到着した。

「ここで待ってた方がいいかな？」

「ああ、その方がいいですよね」

「混んでなかったら……お願いするわ」

「じゃあ僕が、確認してから伝えに来ます」

「わかったよ。じゃあよろしく」

よろしく、と言ったが、運転手は「いやいややっぱり俺も」と言っ
てまた手を貸してくれた。

ついでに病院の中までついて来て、待合室で笑顔を見せた。

「誰もいないじゃないか。じゃあ、すぐに終わるかな？下で待つて
るよ」

気のいい運転手がいたものだ。お客のためにこんなにサービスし
てくれるなんて、偉いな。

「ありがとうございます。じゃあ、お願いします」

礼を言っ、よかったですね、と声をかけた。

もちろん、笑顔で「そうね！」なんて言っではこない。

やってきた受付の女性に、保険証の提示を求められ、清実はまだ
でロボットのような動きでカバンを探っている。

「あの、どこに入ってるんですか？僕が出しますよ」

「うっ……」

返事は唸り声だ。

清実は顔を真っ赤にして、最後に「サイフの中」と言った。

サイフを探す。ちょっとテカテカしたパールピンクの長財布を見
つけ、失礼します、と開いた。

中には無駄なものは入っておらず、整然としている。

自分のと同じタイプの保険証はすぐに見つかり、受付の女性に渡すことができた。

勿論サイフはすぐに閉じて、元の位置に戻す。

簡単な問診表を書き終わると、すぐに診察室へと呼ばれた。

看護師がドアを開けてくれたので、また手を貸して一緒に移動する。

中年の男性医師の前に清実を座らせ、さすがに同席するのはおかしいなと待合室に戻った。

もちろんもう帰りたい。

しかし歩くのもままならない女性を、しかも自分の直接の上司を置いて帰ったりしたら、また「このゆとり世代が」と言われるのは必至だ。大体そこまで、薄情者ではないのだ。

誰もいない待合室は静かで、診察室の声がはっきりと聞こえてきた。

「あつはっは！ギックリ腰だねー！」

今どんな顔をしているだろう。また、般若のような顔になっていないだろうか。

まあいつだってプリプリ怒っていて、近いものはあるけれど。

少しして、看護師に支えられた清実が出てきた。

顔は、やっぱりムカついている表情だ。

気を利かせて、受付で処方された湿布や保険証を受け取る。ついでに新しく作られた診察券を受け取り、診察料もかわりに払った。

「さ、行きましょう」

また手を貸して、待たせているタクシーまで移動する。
これで自分の役目は終わりだ。

いや、確か笹本さんは1人暮らしだった気がする。そんな話を誰かに聞いた。

去年長い間同棲していた彼氏に逃げられて、今は1人なんだと。家族が待っているなら、そっちに連絡するだろう。それをしないということはやっぱり1人で間違いない気がする。

鍵を開けようとして転んでひっくりかえったまま動けないとか、そういう悲しい状況だってありえる。

この気のいいタクシーの運転手なら手伝ってくれるかもしれないが、見知らぬ男よりは、いつもともに仕事をしている部下の方が少しは安心感があるだろう。

せめて無事に家の中に入るくらいまでは、手伝ってあげた方がいいはずだ。

紳士の行いだな。これは。

タクシーと一緒に乗り込んで、隣に座る。

ちよつと怪訝そうな顔で、清実がこちらを見ていた。

「須田くん、もういいわよ。帰って」

「いえ、家まで行きますよ。1人じゃ大変じゃないですか？」

いつもは厳しい女上司の顔が、なんとなく赤らんだ気がした。しばらくして、ようやく返事が返ってくる。

「そう。じゃあ、頼むわ」

「はい！」

返事はハキハキと。そして相手のことを考えて気を利かせ。

いつも清実に言われていることだ。今日はしっかり実践している。

レンガの外壁が少しオシャレなアパートの前でタクシーが止まった。

代金をまたかわりに支払って、車を降りる。

「部屋はどこですか？」

「203号室」

2階建てのアパートに、エレベーターはないようだ。

「良かったですよ、一緒に来て。階段なんて1人じゃ危ないですよ」

またカバンを2つ持って、上司に肩を貸す。

ゆつくりと階段を登りきり、203号室へたどり着いた。

清実はなんとか鍵を開けようとするが、痛みがあるのかなかなかうまくいかない。

「僕がやりますよ」

肩を貸したまま、鍵を差し込んでドアを開ける。

「もういいわよ。帰って」

「そんな。ここまで来たんですから、最後までお手伝いします」

すぐ横から、また小さな唸り声がした。

気の毒に。よっぽど痛いんだな。

ドアを開けて、中に入る。

薄暗い中に小さいランプが見えたので、これが電気のスイッチだなと判断して勝手に押した。

明かりがついて、部屋の中が明るくなった。

玄関のすぐ横にキッチンとダイニングがある。その奥に、もう1部屋あるようだが……。

一瞬でさっきの「帰って」の本当の意味がわかった。

部屋の中は、可愛らしい薄いピンクがあふれかえっている。

ソファカバーには、無駄じゃね？といったくなるくらい量のフリルとリボンがついており、そこかしこに可愛い女児向けのうさぎのキャラクターのぬいぐるみが置かれていた。

奥にある部屋にもあかりが差し込み、おそらくスーパードールワールドが広がっているであろう予感をさせる。だってまず、そこに見えているベッドときたら……。

思わずそちらに気をとられていると、横で清実がドカンと大きな音をさせて倒れた。

「あつ！笹本さん、大丈夫ですか！？」

「大丈夫！大丈夫！！」

慌てた様子で、でもすぐに「ぐわあ」と声をあげて悶絶した。

もしかしてこの部屋を見られなくて、焦ったんだろうか。

確かにこの部屋、いつもは「鬼軍曹」とか「冬將軍」とか呼ばれている清実とは縁遠いイメージだ。

恥ずかしいんだな。

可愛いところ、あるじゃないか。

つい、ニヤけてしまったようだ。

こちらの顔を見て、清実は叫んだ。

「帰れーーーー！！！！！！」

「失礼します」

と一言言って、急いで部屋を出た。

ドアを閉める前に、ひとつ思い出す。

「あの、湿布自分で貼れますか？」

「黙れっ！！」

「はい！」

慌ててドアをしめた。

鍵、自分で閉められるだろうか。

心配だったが、これ以上口出ししたらいけないかなと思って、さつきタクシーで通った時に見えた最寄駅に向かうことにした。

その後恐ろしい女上司は2日会社を休み、週明けに少しぎこちない歩き方で出社してきた。

ぎこちない歩き方で、まず行ったのは部長のところだ。

そして次に、怖い顔をして自分の向かいの席……つまり僕のところに行ってきた。

「おはようございます、笹本さん」

「おはよう須田くん。先週は迷惑かけたわね」

「いえ……もう、大丈夫なんですか？」

「もう平気よ」

その割りに、ちょっとロボットの真似みたいな歩き方だけど。まあ1人で歩けるなら大丈夫か。

「これ、お礼」

そう言っ、紺色の紙袋を渡される。
どうやらお菓子のようだ。

「お礼なんてそんな、いいですよ」

「いいのよ。助かったし」

そこでちょっと、照れたような顔で下を向いた。
それを見て、閃く。

「大丈夫ですよ！誰にも言っ、てませんから」

「何を！？」

「あー。えーつと」

「言わなくていい！」

齒をグワつとむき出しにして、咆えるように言われた。
確かに言っ、たら意味がないな。

勿論、ぎっくり腰になったことも、夢の国のお姫様のような部屋
に住んでいる事も、どちらも誰にも言っ、てない。きつと知られたら
恥ずかしいだろうから。配慮配慮！

昼休みに、もらっ、たお菓子を食べてみることにした。
綺麗な包装紙とリボンに包まれた、立派なお菓子だ。
開けてみるといろんな種類の焼き菓子が入っ、ている。丸い筒状の
お菓子を1つ食べてみると、今まで味わっ、たことのない美味しさだ
った。さすが、高そうなのはある。

「笹本さん！これものすごい美味しいですよ！」

立ち上がって、向かいの上司にお礼を言った。

清実はまだ少し怒った顔で、シーッと人差し指を口に当てた。

しかしこの声は周りに聞こえたようで、同期や仲のいい先輩たちにお菓子を分配するはめになってしまった。幸せのおすそ分けつてやつかな。みんな喜んでくれたから、よしとしよう。

相変わらず僕は、笹本さんの下で仕事をしている。

他人に厳しく当たっているところをよく見かけるが、あの可愛らしい部屋に住んでいると思うともう以前のように恐ろしく感じることはなかった。

仕事の鬼だと思っていたのに、中身は可愛い少女なんだ。

そう考えると、毎日怒っているのもなんだか照れ隠しのように思えてしまう。

印象が変わったおかげで、少し憂鬱に思っていた仕事もなんだか楽しくやれるようになってきた。

あの日の、ギックリ腰のおかげだ。やっぱり人には親切にすべきだよな。

最近では笹本さんからもほとんど怒られなくなった。

もしかしたら僕もいよいよ、仕事のできる男になったのかもしれない。

その後クリスマスに、笹本さんからショーのついたディナーへ誘われた。

もちろんお断りだ。

「彼女との約束があるので」

年が明けてから、笹本清実はそれまで以上に仕事に打ち込むようになった。

その後部長に昇進し、更に出世街道を進んでいくことになるがそれはまた……別な話ということで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8468q/>

カノジョの話 ・ 清実と翔太の場合 ・

2011年3月30日08時01分発行